

Letter

No.14

雪崩分科会レター
— 福澤卓也氏追悼特集号 —

福澤卓也氏追悼特集
1994年度事業報告
1994年度会計報告
雪崩分科会会費納入のお願い
新規研究企画募集
1987年以降の雪崩分科会例会の話題
社団法人日本雪氷学会雪崩分科会運営内規

5
1994年8月31日発行
(社) 日本雪氷学会雪崩分科会

福澤卓也氏追悼特集

■追悼・福澤卓也君

雪崩分科会会長 新田隆三

福澤君は新進の雪崩研究者であり、雪崩教育のオーガナイザーであり、また登山家でもあった。彼の雪崩学は、NOMOのトルネードにも似て、メジャーであるIGSやISSWに切りこみ、鮮烈なデビューを飾りつつあった。豊富な観測と精緻な実験に裏づけられた彼の仕事は欧米でも高い関心をよび、私もこの若い仲間を誇らしく思った。

福澤君が阿部・樋口両氏と組んで展開した雪崩教育の仕事は、この3年間で北海道の大地に定着し、登山者・山スキーヤーへのビーコンの普及や弱層判定法などの面で、わが国のリーダーシップをとりつつあった。山とスキーの技術に長じた彼を、私は雪崩教育の面での頼もしい後継者とみなし、親しく交わらせていただいた。

彼は低温研に留学してきたコロラドのチャーリー・ジスキン氏を親身になって世話した。1992年秋にコロラド州でISSWが開催され、私も参加したが、低温研から福澤君と尾関君（クラストの研究）とが参加した。ワークショップが終わってから、私どもは、チャーリーの運転する車で温泉に遊んだ。その中で、彼は、ヒマラヤの雪崩遭難事例を今後しっかりと分析していきたいと熱く語っていた。

雪崩分科会では、編集幹事としてニューズレター作成に腕をふるってもらった。センスの良さと実行力—これからは彼の時代になると多くの人が感じていた。彼との思いもかけぬ早き別れに残念と言うはかない。ここに雪崩分科会Letterの福澤卓也君追悼特集号を組んで、彼の足跡をしのびたい。

■福澤卓也君の遭難を悼む

倉

北海道大学低温科学研究所 秋田英次

平成6年10月4日夕刻、日本ヒマラヤ協会経由で「9月28日、ミニヤコンカ登山の福澤君他3名との連絡が取れなくなり、遭難の可能性が大きい」との一報が入った。9月21日から10月2日まで私と新田隆三・雪崩分科会会長、富山大学・川田邦夫氏及び気象協会・寺谷拓治氏の4人はインド・マナリーで開かれた雪崩の国際シンポジウムに出席

し、インドから帰国した2日後の悲しい知らせであった。この会議では福澤君と連名で弱層に関する研究発表をしたので、福澤君が戻ってきたらインドの土産話にと楽しみにしていた矢先のことであった。というのはこの会議に出席していた多くの外国の知人が福澤君は元気か、彼の仕事は素晴らしい、学位は未だか等と大いに彼はもてたからである。また現地に滞在している有名な日本人登山家と知り合い、9月28日には素晴らしいインドヒマラヤを案内してもらい、いくらでも面倒を見るから若い人に宣伝をして欲しいと言われたからである。これ等の話を彼に聞かせたら大いに喜ぶと思ひ、彼の一日も早い帰国を心待ちにしていた時であった。その後日を追う毎に彼の生存の可能性は望み薄となり、最悪な状況を覚悟した次第である。福澤君のご家族の悲しみを思うと断腸の思いであり、ひたすら彼の御冥福を祈るのみである。ここに、追悼の意を込めて彼の生い立ちと業績を述べ、皆さんと一緒に若くして逝った彼を偲びたいと思う次第である。

福澤君は昭和40年10月、北海道宗谷郡猿払村で生まれ、地元の猿払村で小・中学校を卒業しました。お父さんが村で土建業を営んでおり、小さい時から道路を作る工事現場へ連れていってもらい、それで自然や山が大好きな少年に育ったようです。田舎では大変な秀才だったようです。また、小学校の頃から書道を学び、初段の腕前ということで、非常に達筆で、しかも、大変勢いのある文字を書いていました。なお、雪氷学会北海道支部の機関誌「北海道の雪氷」の題字は彼の筆によるものです。中学校を卒業すると入学定員の5%だけを他地区から合格させるという制度によって、札幌の有名進学校・旭ヶ丘高校に入学し、そこを卒業し、北大に入学しました。北大に合格したときは記念に流水のあるオホーツク海岸を網走から稚内までヒッチハイクしたそうです。平成元年に理学部地球物理学科を卒業しましたが、卒業前に雪崩の勉強をしたいと言って私のところへ来たのが彼との最初の出会いです。無事大学院に合格し、低温科学研究所で2年間、雪や雪崩について学びました。修士1年のとき、北海道大学ワンダーフォーゲル部OB会の「ヒンズークシュ遠征隊」に隊長として参加し、ネパールの5000m級の2つの山岳の初登頂に成功しています。平成3年3月修士課程修了、同年4月低温科学研究所助手に採用されました。修士の時から雪崩の研究を行い、特に雪崩の発生メカニズムと山岳雪崩の事故統計、雪崩の啓蒙に情熱を傾けていました。修士1年の冬は2ヶ月間、殆ど一人で北大天塩演習林にある雪崩観測所で表面しもざらめ雪の形成に関する観測をしました。この観測結果をまとめ、修士2年の秋にはアメリカでの雪崩の国際会議で発表した「表層で急速成長するしもざらめ雪」と題した論文は高く評価されました。その後もこの研究を精力的に進め、しもざらめ雪の力学試験へとすすみ、さらに2つの論文を国際会議で発表しております。これらをまとめて本年中に学位論文として提出する予定にしていました。

また、登山者やスキーヤーに対する雪崩啓蒙にも積極的に取り組み、平成2年には彼が中心となり第一回雪崩セミナーを開催しました。このセミナーは大変好評で新聞やテレビでも報道されました。その後は日本雪氷学会北海道支部・北海道雪崩事故防止研究会・北

大山とスキーの会等との共催で毎年開催されておりますが、彼はその中心になり精力的に活躍しました。このセミナーで雪崩の埋没者を捜索する雪崩ビーコンの実演を行い、その威力と実用性を示しました。その結果、雪崩ビーコンは日本でも急速に普及するようになりました。

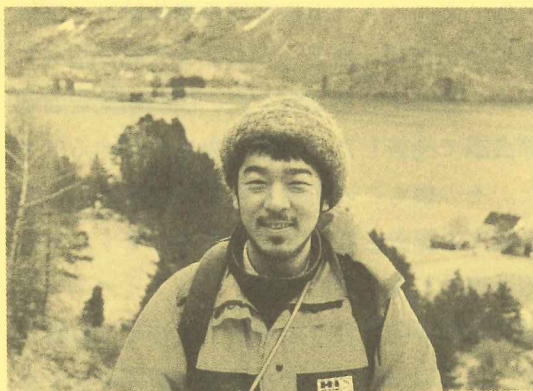
平成4年2月にはノルウェーとの人工雪崩共同実験に参加し、斜面積雪の安定度の判定や観測中の雪崩に関する安全管理に関する責任者としてその任務を一二分に発揮しました。

平成5年には文部省の科学研究費で「山岳雪崩災害の現状分析と防災対策の検討」という報告書を完成しました。ここでは北海道、富山、長野県内で発生した340件の雪崩を分析しています。さらにこれらの雪崩をデータベース化し、発生地点を地図上で示しました。これらの資料は登山者・スキーヤーには貴重なデータとなるもので、つい先日、NHKから、このデータベースをパソコンネットワークに載せたいので了解して欲しいという電話がありました。これを利用すると全国どこからでも過去の雪崩災害情報がパソコンで検索でき、雪崩事故防止に役立つものです。

平成5年の暮れ、雪崩対策の先進国スイスへ雪崩事故防止研究会の仲間3人と取材に出かけ、山岳雑誌「山と溪谷」の1994年4、5月号に「山岳先進国スイスの雪崩事情」というレポートを発表しております。ここでは雪崩予知、コントロール、救助法等を紹介し今後の日本の雪崩対策や雪崩教育について提言しています。その後雪崩事故防止研究会では山と溪谷社から登山家やスキーヤー向けの雪崩の啓蒙書を出版する計画をたて、彼の分担分の原稿をミニヤコンカへ出発する時、東京の出版社へ置いていきました。現在、彼の意志をついで原稿を完成し出版する準備を行っております。

遭難の報を受けてから多くの方からお悔やみの手紙や電話をいただきました。ここにお礼を申しあげるとともに、心から彼等の御冥福を祈りたいと存じます。

■有りし日の福澤卓也氏



人工雪崩実験のために行ったノルウェーにて

■ミニヤ・コンカ峰遭難（1994年）の経緯

1. 登山計画

1) 目標の山

中華人民共和国四川省甘孜チベット族自治州
ミニヤ・コンカ峰 (Minya Konka) 7,556m

2) 登山期間

1994年8月17日～10月25日（70日間）

3) 登山の目的

- 1) ミニヤ・コンカ峰北東稜から初登はん
- 2) テイクイン・テイクアウトの徹底
（山岳の自然を汚染しない運動）
- 3) 中国登山界との親善交流

4) 派遣母体

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN (HAJ)

5) 隊の構成

隊長	山森 欣一 (50才)	東京	総括
副隊長	渡辺 斉 (54才)	埼玉	登はん
登ハンL	福澤 卓也 (28才)	北海道	食糧
隊員	高田 幸子 (44才)	埼玉	医薬
〃	渡辺 靖之 (27才)	長野	環境
〃	鈴木 洋介 (27才)	北海道	食糧
〃	工藤 潤二 (22才)	愛知	装備

（以上7名）

日本ヒマラヤ協会が隊員を公募し、7名の隊員が最終的に決定したのは1994年3月であった。この過程で、福澤卓也は登はんリーダーに選ばれ、かつ気象・雪氷の観測を担当することとなった。

2. 行動経過

1994年8月17日、成田発、北京着。

8月25日、標高3,950mにベースキャンプ（BC）設営。BC周辺に、雨量計、気温計、日射計等を設置。

8月28日より、上部に向けてルート開拓および荷揚げを開始（いわゆる、極地法による）。

- 8月31日、C1 (4,200m) 建設。
- 9月6日、C2 (4,950m) 建設。
- 9月19日、C3 (5,850m) 建設。
- 9月20日、北東支稜の6,050mまで到達。

この間、福澤、渡辺（靖）、鈴木、工藤の内2名がルート開拓、2人が荷上げ、渡辺（斉）、高田が後続して荷上げ、山森はBCまたはその下方にて指揮という体制であった。

計画では、6,800m付近の稜線上に第4キャンプを設け、そこから日帰りで頂上を往復することになっていた。

3. 遭難と捜索

9月28日、07時、C3の福澤からBCへ「天候雪、風強いが降雪はたいしたことない、視界300m」と報告があった。C1は積雪10cm。BCでは朝方降った湿雪が13cm。BCでは8時30分にミニヤ・コンカの頂上が見えた。9時過ぎから雪となる。

11時、福澤は「現在4人でC3にいる。ラセン階段上の荷の回収を終わって新しいテント1張り設営。アラレが強いが風は朝からみると弱くなった」と報告があった。その後C1の渡辺副隊長からC3の表層雪崩の危険について聞かれた福澤は「北東支稜の雪崩はテントまで届かない。氷河からの雪崩は走路から相当離れているので危険性はない。4人共体調はいいので、4人で支稜に行く。気温は温度計測していないが-7~8°」と答えた。その後更にヒドンクレパスに対する注意を受けて、「アンザイレソして行く。一緒のところに固まらない」などと答えた。

これが4人との最後の交信であった。

15時の定時交信で、BC（隊長）、C1（副隊長）のいずれも、上部のパーティー（トランシーバー2台）と交信ができなかった。以後、21時まで30分毎に交信を試みるも、応答なし。

29日、副隊長は体調悪く、高田とともにC1滞在。終日、トランシーバーに応答なし。

30日、副隊長、高田はC1出発、C2着。C2の上部を観察するが、人影や物を何も確認できない。

10月1日、2人はC2から階段状氷河に取りつく。BC方向のガス以外は晴れ。階段状氷河の積雪は30cm。固定ロープは全て埋まり取りつきも確認できないほど。この日2人は固定ロープ4本を掘り起こすのが精一杯であった。この日も北東支稜や氷河上に人影は無かった。山森隊長は、「現在の2人の力では、天候がよくてもC3に到達するためには、早くても5~6日は必要である。また、天候も下り気味となっている。現場の状況を総合的に判断すると、[雪崩で4人が一瞬にして埋没した]可能性が高く、この時点で生存しているとは考えられない。これ以上無理をすれば2人の安全も危ういことになる。」と判断し、17

時、捜索活動を打ち切ることを決定した。

10月2日、事故連絡のためBCから中国の連絡官が下山。10月5日、遭難の第一報が日本ヒマラヤ協会に入った。以後、地上からも上空からも捜索活動は一切行われていない。したがって、事故原因を特定する情報は無い。

以上、「ミニヤ・コンカ登山計画」および「ミニヤ・コンカ峰登山と遭難の記録（山森欣一執筆）」等から抜粋、編集（北大低温科学研究所：成瀬廉二）。

■福澤卓也氏業績一覧

- 1) 福澤卓也 1990 雪ルーペ（素早く正確な雪質判定のために）。雪氷, 52, 123-125
- 2) 秋田谷英次・清水弘・成瀬廉二・福澤卓也 1990 ニセコ雪崩(1990.1)の積雪と気象条件から見た発生機構。低温科学, 物理篇, 49, 15-23
- 3) Chales Ziskin・福澤卓也 1990 アメリカにおけるスキー場の雪崩制御。第一回雪崩セミナー報告書（低温科学研究所雪害科学部門）, 13-18
- 4) 福澤卓也・Chales Ziskin 1990 雪崩ビデオ紹介。第1回雪崩セミナー報告書（低温科学研究所雪害科学部門）, 19
- 5) 児玉裕二・西村浩一・石井吉之・小沢久・野村睦・福澤卓也・山田知充 1990 今、なぜ雪渓調査が必要か？—大雪山ヒサゴ雪渓調査概要— 平成2年度日本雪氷学会全国大会講演予稿集, 101
- 6) 秋田谷英次・清水弘・成瀬廉二・福澤卓也 1990 1990年1月15日ニセコスキー場の雪崩事故。日本自然災害学会学術講演会講演集, 9, 78-79
- 7) 福澤卓也・秋田谷英次 1991 しもぞらめ雪層の急速成長過程の観測。低温科学, 物理篇, 50, 1-7
- 8) 福澤卓也・秋田谷英次 1991 大きな温度勾配の下でのしもぞらめ雪成長実験（I）。低温科学, 物理篇, 50, 9-14
- 9) 秋田谷英次・福澤卓也・西村浩一 1991 狩場2号橋の流失災害。低温科学, 物理篇, 50, 77-81
- 10) 福澤卓也・秋田谷英次 1991 積雪表層における雪温変化と変態過程。低温科学, 物理篇, 50, 資料集, 25-31
- 11) 福澤卓也・秋田谷英次 1991 しもぞらめ雪の急速成長。平成3年度日本雪氷学会全国大会講演予稿集, 13
- 12) T. Fukuzawa and E. Akitaya 1991 Quick growth of depth hoar in a surface layer. Proceedings of International Snow Science Workshop, 303-306

- 13) 福澤卓也編集 1992 ヒンズークシュの山旅 (北海道大学ヒンズークシュ遠征隊報告書). 北海道大学ワンダーフォーゲル部OB会ヒンズークシュ遠征委員会発行, 62pp.
- 14) 福澤卓也 1992 雪崩の発生メカニズム. 雪崩講習会 (第2回雪崩セミナー) 報告書 (低温科学研究所雪害科学部門), 9-10
- 15) 福澤卓也・Chales Ziskin 1992 雪崩ビーコンの紹介. 雪崩講習会 (第2回雪崩セミナー) 報告書 (低温科学研究所雪害科学部門), 11-12
- 16) 福澤卓也 1992 北海道山岳雪崩地図. 雪崩講習会 (第2回雪崩セミナー) 報告書 (低温科学研究所雪害科学部門), 14-27
- 17) 福澤卓也・秋田谷英次・松本慎一 1992 大きな温度勾配の下でのしもざらめ雪成長実験 (II). 低温科学, 物理篇, **51**, 23-30
- 18) 福澤卓也 1992 北海道の山岳雪崩. 寒地技術シンポジウム'92講演論文集, 484-488
- 19) 秋田谷英次・石井吉之・福澤卓也 1992 1991・1992年冬期の北海道の積雪と雪崩事故. 日本自然災害学会学術講演会要旨集, **11**, 130-131
- 20) 秋田谷英次・成瀬廉二・福澤卓也 1992 1991-1992年冬のニセコ雪崩. 北海道地区自然災害科学資料センター, **7**, 71-77
- 21) 福澤卓也・成田英器・秋田谷英次 1992 しもざらめ雪からなる弱層のせん断破壊実験 (I). 平成4年度日本雪氷学会全国大会講演予稿集, 57
- 22) T. Fukuzawa and H. Narita 1992 An experimental study on the mechanical behavior of a depth hoar layer under shear stress., Proc. ISSW, Breckenridge Colorado, 171-175
- 23) 福澤卓也 1993 山岳雪崩災害の要因分析と今後の予防対策に関する研究. 自然災害科学総合シンポジウム要旨集, **30**, 141-142
- 24) 福澤卓也 1993 山岳雪崩災害の現状分析と防災対策の検討. 文部省科学研究費, 「自然災害の予測と防災力」ワーキンググループ研究成果報告書 (研究代表者 福澤卓也), 55pp.
- 25) 福澤卓也・飯田肇 1993 山岳雪崩地図. 平成5年度日本雪氷学会全国大会講演予稿集, 7
- 26) 福澤卓也・秋田谷英次 1993 積雪状態の数値シミュレーションと雪崩発生予測への発展性について. 平成5年度日本雪氷学会全国大会講演予稿集, 9
- 27) T. Fukuzawa and E. Akitaya 1993 Depth Hoar crystals growth in the surface layer under high temperature gradient. Annals of Glaciology **18**, 39-45
- 28) 秋田谷英次・福澤卓也 1993 札幌の平地積雪断面測定資料—平成4年～5年冬期—. 低温科学, 物理篇, **52**, 資料集, 1-10
- 29) 秋田谷英次・福澤卓也・尾関俊浩・川島由載・坂井亜規子 1994 札幌の平地積雪断面測定資料—平成5年～6年冬期—. 低温科学, 物理篇, **53**, 資料集, 1-10

- 30) 八久保晶弘・福澤卓也・秋田谷英次 1994 積雪表面霜の形成機構. 北海道の雪氷, 13, 26-29
- 31) 福澤卓也 1994 山岳先進国スイスの雪崩事情一前編. 山と溪谷, 4, 19-23
- 32) E. Akitaya and T. Fukuzawa Morphological studies of weak layers in regard to avalanche release. 1994, Extended Abstracts of International Symposium on Snow & Related Manifestations, 38-40
- 33) A. Hachikubo, T. Fukuzawa and E. Akitaya 1994 Formation rate of surface hoar crystals under various wind velocities. ISSW'94, 132-137
- 34) 福澤卓也・八久保晶弘 1994 積雪調査の方法と降雪量の測定法 (連載・雪の調査法 ②). ゆき, 16, 108-116

1994年度事業報告

■1994年度雪崩分科会例会

日 時：1994年9月28日17時～19時

場 所：金沢大学工学部13番教室

出席者：17名

■ニュースレターNo.13の発行 (1994年8月31日)

■ビジュアル模擬雪崩シンポジウムの開催

日 時：1994年9月7日13時～17時

場 所：森林総合研究所十日町試験地

クロス10

出席者：56名

■第6回雪崩対策の基礎技術研修会の開催

日 時：1994年4月12日～4月14日

場 所：新潟県南魚沼郡湯沢町

受講者：46名

1994年度会計報告

1994年度収支決算(1994.4.1~1995.3.31)

■<収入>

繰越金	335,645円
会費	14,000円
利息	394円
計	350,039円

■<支出>

郵送料	34,214円
研究補助金	100,000円
交通費	75,740円
文具・消耗品	2,791円
計	212,745円

■1995年度繰越金 137,294円

雪崩分科会会費納入のお願い

ニューズレターの発行や、企画の連絡等は会員の皆様の会費によって運営されています。
平成7~8年度の会費の納入を下記の通りお願いします。

記

■1. 会費	個人会員	1000円
	団体会員	2000円

注) 会費の納入は2年毎に行われますが、手続きが煩雑に思われる方等については、会費の4年分、6年分…の一括納入も可能です。

■2. 納入の方法

郵便振替口座をご利用下さい。

口座番号：00670-0-26949

口座名称：日本雪氷学会雪崩分科会

■ 3. その他

領収証が必要な方は、振替用紙の裏に、その旨を付記して下さい。

その他、不明の点がありましたら会計幹事まで連絡下さい。

会計幹事 藤澤和範 [REDACTED]
建設省土木研究所新潟試験所

新規研究企画募集

雪崩分科会ではその活動を活性化するため、会員間に関心のある調査・研究課題等について研究会を組織し、より多くの関心ある人達の検討を加えて研究が発展することを目的として会合費程度の援助をするようにしています。

企画の応募をご希望の方は、形式はありませんが、研究部会名、簡単な目的と内容、代表者名（世話役）等を明記して下記、分科会庶務宛にお知らせ下さい。

庶務幹事 納口恭明 [REDACTED]
[REDACTED]
長岡雪氷防災実験研究所

【これまでの採択状況】

- 1990～1992年：雪崩ダイナミックスワーキンググループ（代表 前野紀一）
- 1993～1994年：模擬雪崩研究グループ（代表 納口恭明）
- 1995年：「気象研究ノート」執筆・編集のためのワーキンググループ（申請中）
（代表 西村浩一）

1987年以降の雪崩分科会例会の話題

■ 1987年10月6日（釧路）

- 1. 乾雪表層雪崩の発生 遠藤八十一（林業試験場十日町試験地）
- 2. 表層雪崩の衝撃力 川田邦夫（富山大学理学部）
- 3. 表層雪崩の連動 前野紀一（北海道大学低温科学研究所）
- 4. 新潟県における表層雪崩の事例 町田 誠（町田建設株式会社）

■ 1988年10月24日 (東京)

1. スイス連邦工科大学における雪崩研究
納口恭明 (長岡雪氷防災実験研究所)
2. 東アルプスの雪崩対策—自然災害防止国際シンポジウム報告—
新田隆三 (森林総合研究所)
3. ノルウェーでの国際シンポジウム報告
成田英器 (北海道大学低温科学研究所)

■ 1989年10月28日 (弘前)

1. 建設省の集落を対象とした雪崩対策事業について
熊谷 晃 (山形県土木部砂防課)
寺田秀樹 (建設省土木研究所新潟支所)
2. 雪崩と侵食について
小野寺弘道 (森林総合研究所東北支所)

■ 1990年10月16日 (十日町)

1. 雪崩ダイナミックスの現状と問題点
成田英器 (北海道大学低温科学研究所)
2. リグフォーンプロジェクト発足の経緯
前野紀一 (北海道大学低温科学研究所)
3. リグフォーンプロジェクトの概要
西村浩一 (北海道大学低温科学研究所)
4. 斜面上の重力流の性質
木村竜治 (東京大学海洋研)
5. 雪崩を探る
中川昌美 (東北大学工学部)

■ 1991年10月28日 (つくば)

1. 雪泥流災害の事例と問題点」 和泉 薫 (新潟大学)
2. 昭和20年3月「土雪流」による西津軽大然(おおじかり)部落壊滅
鶴田要一郎 (マタギ研究家)
3. 富士山におけるスラッシュ雪崩の特質—発生のメカニズムと流れの様態—
安間 荘 (株建設基礎調査設計事務所)

■ 1992年10月22日 (札幌)

1. 雪崩ダイナミクスWGからの報告 前野紀一 (北海道大学低温科学研究所)
2. 日本のスキー場における雪崩コントロール・ガゼックスの実験
上石 勲 (株アルゴス)、飯吉章通 (株東京倶楽部)

3. ISSWに参加して 福澤卓也 (北海道大学低温科学研究所)

■1993年10月17日(新庄)

1. 中国梅里雪山で発生した雪崩の走路推定
中尾正義 (名古屋大学水圏研)
2. ビンポン球のなだれ 納口恭明 (長岡雪氷防災実験研究所)

■1994年9月28日(金沢)

1. 米国ソルトレーク市近郊スキー場での雪崩観測
阿部 修 (新庄雪氷防災研究支所)
2. カナダの雪崩見聞録 和泉 薫 (新潟大学災害研究センター)
3. リグフォーン雪崩実験 '93・'94
西村浩一 (北海道大学低温科学研究所)

■社団法人日本雪氷学会雪崩分科会運営内規

■目的 雪崩分科会は雪崩および雪崩災害防止に関する研究と技術の発展に寄与することを目的とする。

- 業務
- 1 雪崩に関する研究会および集会の開催。
 - 2 雪崩研究に関する重要事項の検討と推進。
 - 3 雪崩分科会の運営に必要な年次例会の開催。
 - 4 その他必要な事項。

- 組織
- 1 雪崩分科会は(社)日本雪氷学会定款第30条および同細則第31~35条に定められた分科会の一つであり、上述の目的に賛同して加入を申し出た日本雪氷学会会員により構成される。
 - 2 雪崩分科会は会務を総理する分科会会長とこれを補佐する若干名の幹事をおく。また監事1名をおく。役員任期は2年を原則とし、再任を妨げない。
 - 3 雪崩分科会会長は例会により選出される。分科会幹事は分科会会長により委嘱される。
 - 4 雪崩分科会会長は毎年分科会年次例会を招集する。年次例会では出席会員により、会の事業、財務、役員選出、運営内規改廃などの審議を行う。

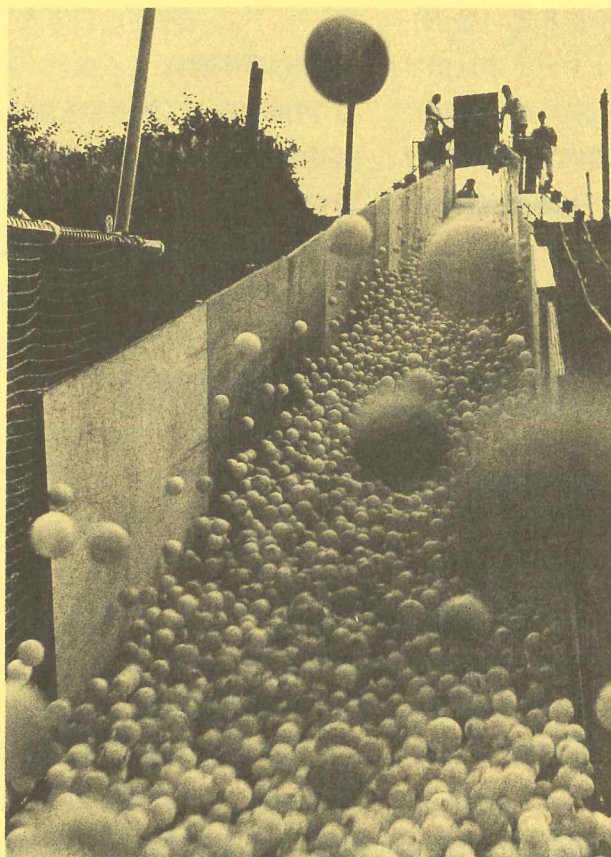
- 5 雪崩分科会は日本雪氷学会理事会の承認をうけた一定額の分科会会費を徴収することができる。

■付記

本運営内規は1986年10月20日より施行する。

分科会会費は年500円とする(1986年12月20日理事会承認)。

本運営内規を社団法人化にともない改訂し、1994年4月1日より施行する(1993年10月17日)。



ピンポン球3万個の模擬雪崩実験。1994年9月7日十日町で行われたビジュアル模擬雪崩シンポジウムでのデモンストレーション。

(写真は朝日新聞社提供)

(社) 日本雪氷学会 雪崩分科会

事務局

長岡雪氷防災実験研究所 納口恭明